

リハビリで のみ込む力を

「食べ物をかんで、のみ込む力」を失った人が、高齢者を中心に増えている。加齢にもよるのだが、脳卒中の後遺症などによるまひが口の中にもあり、うまく食べられないケースも少なくない。そうした場合も回復の可能性は残されている。歯科医師たちの意欲的な取り組みを紹介する。（加藤木信夫）

歯科医師ら先駆的試み

「さあ、いつものように口の中を刺激していきますよ」

昨年末、難病のため四肢まひとなり、胃ろうを装着した埼玉県熊谷市の男性（セ）を同市のいわさき歯科院長、岩崎貢士さん（岩）が訪問診療し、あうんの呼吸で、電動歯ブラシを口の中にそっと差し入れた。

岩崎さんは、あらかじめ男性の口の中の汚れを取り除いてから、電動歯ブラシの背の部分で上下唇、舌、頬などを刺激した。舌に押し付けたガーゼを、舌で持ち上げる筋力トレーニングなども織り交ぜた。

三十一日四十分後、男性は

岩崎さんが用意した特製ゼリーを食べた。ゼリーは水分を増やし、短冊状にして喉を通りやすくしてあるため、口をもぐもぐさせて味わい、くぐりくぐりのみ込んだ。

訪問診療は定期的であり、男性はその後、安定した状態を維持しているという。

「口の中に刺激を与える」と、眠っていた脳機能にスイッチが入る。少しずつ食べられるようになり、生きる意欲を取り戻して、旅行に出かけるほど元気になった患者さんを、私は何人も見てきた」と岩崎さん。

「摂食・嚥下リハビリ」と呼ばれる一連の取り組みは、最近、にわかには、歯科医師の医療従事者の間で関心が高まってきた。歯科で、脳卒中などの高齢者への取り組みのパイオニアは日本大歯学部（東京都）の植田耕一郎教授（五巴）。岩



難病の患者に電動歯ブラシの背を使い、振動で刺激を与える歯科医師の岩崎貢士さん（埼玉県熊谷市で）



口の周りの筋肉などを鍛えるために使われる医療器具。唇で挟み込み引っ張ったりすることで筋肉が鍛えられ、かむ力やのみ込む力の維持・向上、唾液の分泌促進の効果がある

生きる意欲取り戻す人も

東京新聞 2014年1月28日
朝刊 18面

崎さんも大学の恩師である
植田さんに導かれ、足を踏
み入れた。

植田さんにはきっかけが
あった。東京都リハビリテ
ーション病院に勤務し始め
た一九九〇年、脳卒中患者
の口の中をのぞき、がくぜ
んとした。バナナや魚の切
り身が食べたままの形で残
り、かびが生え、すさまじ
い様相を呈していた。

「手足にまひがある人
は、口の中もまひして、思
うように食べられない。で
も、医師は口の中までじっ
くりと診て、手で触れるこ
とはない。私たち歯科医師
がやらなければ誰がやるん
だ、と奮い立った」

患者の口にボタンをくわ
えさせて糸で引っ張る筋ト
レ、電動歯ブラシによる口
内マッサージなどを次々に
発案した。蓄積したノウハ
ウは、植田さんが指導する
日大歯学部「摂食機能療法
学講座」で医局員に伝授さ

れている。外来診療や訪問
診療も実施し、対象患者は
脳血管疾患、がん、心疾
患、認知症、パーキンソン
病など多岐にわたる。

「四人に一人が高齢者の
時代。摂食・嚥下リハビリ
は社会に求められている。
一方でそれをこなせる歯科

医師は、全国的にはわずか
の涙ほどでもない。実践教
育の推進を」と植田さん。
岩崎さんも「開業臨床医の
レベルでもリハビリに取り
組めることを、私がモデル
ケースとして示したい」と
意気込む。

全国の歯科医師らで構成
するNPO法人「日本顎咬

合学会」は、かむ機能、の
み込む機能を回復させる取
り組みを続けている臨床医
の活動報告会をジャーナリ
ストに公開。高齢者のみならず、虫歯などで口の中の
機能を損なった子どもたち
にも効果があるとアピール
する。

担当者は「自分の歯で、
あるいはしっかりとつくら
れた入れ歯でかむことが、
生涯の健康と総医療費の抑
制につながる」と話す。

問い合わせは日大歯学部
摂食機能療法科 電03(3
219)8088、いわさ
き歯科 電048(521)
0528へ。